
どないやねんッ！ ~いいからテメエ等帰ってくれ~

滾

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どないやねんッ！ ～いいからテメエ等帰つてくれ～

【Zマーク】

Z2302C

【作者名】

滾

【あらすじ】

ヤツが再びやってきた。モチロン、彼女を引き連れて。それと、あと一人・・・。誰だお前・・・？

一話 誰ゾ!?

午後五時。

僕は家に居ました。
特にすることもなく、椅子に座つて漫画を読んでいたのです。
すると、

ピンポーン・・・

最近取り替えたばかりのインターフォンが鳴りました。
まだ聞きなれないそのインターフォンに氣だるさを覚えながら、僕
は漫画本を置いて玄関に向かいました。
いつもならば母なり祖母なりがインターフォンを取るのですが、生
憎その日は僕しか居ませんでした。

「へいへい・・・」

誰ですかね?と、玄関を開けました。

あー、っと、

僕の家つてのは、口で表現するのが難しいのですが、家の玄関を出
てからちょっと10mくらい歩いた所に、家の敷地を出る表玄関が
あるのです。
だから玄関を開けて、ちょっと歩いた時点で誰が来ているのかは解
るのです。

奴だ。

僕は立ち止まりました。

奴です。

ヤマダ（仮）です。

来ましたよ。奴が。モチロン、隣には彼女の姿も見えます。物凄くシターンしたかったです。ムーンウォークが出来たら、向こうに歩いてる振りして家の中に戻っていきたかったです。が、生憎僕はムーンウォークができないので、そのまま歩くしかありませんでした。

そして、

「よお」

と、ヤマダが手を挙げました。

「よお・・・」

と、僕も手を挙げました。

「こんばんわ」と、彼女さんは頭を下げました。毎回四つのですが、この彼女さんは凄く礼儀正しいですね。

閑話休題。

僕は彼女さんにも挨拶をしました。そして、「何の用?」と表の玄関を開け、

「・・・・あ?」

気付きました。

ヤマダの右隣。彼女の左隣。一人の間に、誰か居る。

誰ゾ!?

僕は一瞬身じろぎました。

だって、全く見覚えの無い男性が立つてるとでもん。
誰さ。アンタ誰さ?

今度ばかりは、中学時代のクラスメイト、とかそういうものでもな

いです。

一切記憶の中にその人の顔がありません。まさしく初対面です。

「あ、どうも・・・」と、その人は頭を下げました。

「あ、どうも・・・」僕も下げました。

誰？って凄く聞きたかった。

まあ、ともかく。

「上がれよ」

と、いう事で、やっぱり今回も僕は彼等を家に上げてしまひのでした。

一話 誰ソー!?(後書き)

ヤシの話です。
そういう事なのです。

一話 メンバー追加

さて。さてさて。

ここは僕の部屋の中。僕の他に三人の人達がいらっしゃいます。
ヤマダと、彼女さん。そして、

タカノ（仮）君。

誰ですかね。この人は。

やはり僕の記憶の中にこの人は居ません。先ほどヤマダに「タカノ君だよ」と紹介されましたか、知りません。

聞くに、タカノ君はヤマダと彼女さんの高校のクラスメイトだそうで、何故だか今日は一人についてきてしまつたそうです。

何でそんな・・・。

そんな人だからよほど明るい感じなかなか、と思つていたらばこの部屋に入つてから一切口をお開けになあらせん。

多分、二人の雰囲気に圧されて来ちゃつた感じだと思います。

「で？」

何の用？

ベッドに右から彼女さん、ヤマダ、タカノ君と座つてゐるのですが、
その真ん中のヤマダに問い合わせました。

すると、ヤマダは一言、

「あ、いや、今日はノープラン」

あ？

ノープラン、
だ、そうです。

今の「ノープラン」発言にモチロン僕は驚いたのですが、それよりも驚いていたのは誰あらうタカノ君です。

僕も、「え？」って顔になりましたが、それ以上に「え？」って顔をしてらっしゃいました。

「え？」つて。

さて、僕も高校から帰ってきて間もないのに本当はスグにでも寝たいのですが、そうもいかないようです。

現時刻、四時半少し前。

まあ、何かをやろうと思えば出来なくも無い時間帯です。

が、はつきり言って僕はこのメンバーで何をしようとも思いません。

一切思いません。

が、何かいい加減タカノ君の顔の引きつり具合が限界です。笑顔作つて良いのか困つていいのかわからず、何やら歪な表情になつてます。

このままだとタカノ君の顔面が神経痛になりかねないので、僕はある行動に移りました。

行動一 携帯電話を取り出して、友達のフォルダの中から、今暇そうな人達の名前を数人探し出す。

行動二 そいつ等にひたすら連絡をする。

行動三 呼ぶ。

行動四 迎える。

とりあえず行動一、二から、5・6人の人間に連絡をとりました。で、とりあえず3・4人に連絡ついたので、

呼びました。

あれです。

毒を食らわば皿まで

つてやつです。

こうなつたら人を呼びまくつてやるぜ。
つてことで呆気に取られる三人を他所に三人をこちらに向かわせる
事に相成りました。

一人は中学時代、ヤマダと僕と同じクラスの一員だった“トクノ（
仮）さん”。女性です。

二人目は同年のお友達の“ブロンドA”。

三人目は”ブロンドA”的お友達の”ブロンドB”の三人です。

程なくして、ブロンドA・Bが原付で我が家に到着。ブロンドの髪
をかきあげつつ、僕の部屋に向きました。

ブロンドA・Bが部屋に入つたときの他三人の顔は今でも忘れませ
ん。

さきほどタカノ君の「え？」顔の十倍の「え？」顔をしてうつし
やいました。

「あん？ 滾、コイツ等誰？」

「友達」

「マジで？ 何すんの？」

「もう一人くるから待つてる」

そんな会話をしているともう一人の待ち人“トクノさん”が自転車
で到着。

迎えると、

「やあん、久しぶりだねえ！」

と相変わらずのハイテンションでした。

僕、ヤマダ、彼女さん、タカノ君、ブロンドA・B、トクノさん。

この六人をそろえると化学反応が起こる。

僕がその事を見るのは、もう暫く後の話なのです。

一話 メンバー追加（後書き）

テストやらなんやらで遅くなってしまいました。
そういうえば今回初めて僕が高校生である事を明かした気がします。
まあともあれ、楽しんで頂ければ幸いです。

二話 シュラバ

さて、
さてさて。

部屋が狭いです。
至極狭いです。

未だかつてこんなに部屋に窮屈感を感じたことはございません。
まさしく初体験でござります。

とりあえず僕の部屋の中には六人のセイエイが集っているわけです
が、その配置をお伝えします。

僕はいつもどおり、パソコンの前の椅子に。
ブロンズA・Bは僕が座っている椅子の後ろの床に座つて。
そしてベッドの上に、右からタカノ君、彼女さん、ヤマダ、トクノ
さんの順に座つております。

ね？

今違和感に気付いた人拳手。

いないのか？うん？居ないのか？

・・・・ハイ（拳手）。

僕のベッドはですね、そんなに大きくないのです。
いや、一般基準よりは大きいのですが、四人横に並んで座つて余裕
綽々とまではいかないのです。

さらに言えば、タカノ君と彼女さんの間にケツコウな隙間があるの
で、残された三人の距離がどうしても詰まってしまいます。
が、まあ頑張れば一人分は開けるかな？程度の余裕はあるのです。

が、別にヤマダと彼女さんの間に隙間は必要ありません。何故なら二人は付き合っているのですから。

ね？

ここまででは〇×。
もーまんたい
無問題。

けどね？

ダケドネ？

ナゼ、トクノさんとヤマダの間の距離が零なのでしょう？

ヤマダが彼女さんとトクノさんに挟まれている状態になっています。
「何かスゴイ久しぶりだねえ」。元気してた？」とトクノさん。

「え、あ、うん」とヤマダ。

「何か雰囲気変わったねえ。カツ」「よくなつたよ」とトクノさん。

「あ、そ、そう? ありがとう・・・」とヤマダ。

なうにセレヒのラブロメ。

あれです。

トクノさんはあれなんです。

クラスに一人は居るような、ボディータッチがやけに多い女子タイプの人なんですね。

会話の最中もずっと、ヤマダの肩を突いてみたり、顔を覗かせてみたりと、傍から見るとラブローブなカッポー（カップル）にしか見えません。

あ～、つと。忘れていました。タカノ君の事を完璧に忘れていました。
ふ、と、そつちを見ます。

ポツツーン・・・

そんな効果音が聞こえました。絶対聞こえました。

全世界に一人きりなんダゼ・・・。

そんな表情をしていらっしゃいます。孤独の頂点を極めていらっしゃいます。

なんか今にも孤独死してしまいそうな、やるせない表情で虚空を見つめていらっしゃるのです。

そう、まるで畳の目の数を数えるかのように！ もうそんなタカノ君は・・・、

スルーします。敢^あえて。

気を取り直して、プロンドA・Bの方を見ます。
本読んでます。

はい、おしまい。

ああ、そういうえば彼女さんはどうしていらっしゃるのかな?
僕はふと思ったので、そつちもちらりと見ました。

ちらり、とね。

本当にちらりとみました。

と、いうか、

ちらり、としか見れなかつたのです。

だつてさ、だつてさ、

すンげえ睨んでるンスよ。彼女さんがトクノさんを。

もの、コツツ睨んでるんスよ。メッサ怖いんスよ。

ああ、地獄を見るゼ・・・。

僕はよつやく、その事に気が付いたのでした。

三話 シュラバ（後書き）

ふと気付けば、「小説家になろう」に初めて小説を投稿させていた
だいてから早くも一年が経っていました。
それだけです。

四話 タカノカエル

さて、
さてさて、

シユラバです。
修羅場です。

僕の部屋の中なのに、何故か僕ではなく友達が修羅場です

僕はパソコンの前でパソコンを弄つていて。フリをしています。
さつきから同じページの同じ行を繰り返しクリッカエシ見ていま
す。

ずっとマウスもキーボードも動かしてすりません。
マウスの上に手をのせていてだけです。

僕が座つているパソコンの右隣にベッドはあるのですが、もうそつ
ちの方に視線をもつていけません。
えーっ、と、

改めてもう一度今の状況をお浚いしましようか。

まず、

ヤマダ（仮）、「彼女さん、タカノ君（仮）が僕の家を訪問。
僕と始めてなタカノ君はこの場につれてこられたことに対する困
惑気味。

それ以上に僕は困惑気味。
特に理由も無く僕を困惑させたヤマダに腹が立つて更に三人の友人
を追加。

その中の一人が僕とヤマダとが昔同じクラスだったときに、共に同

じ教室で授業をしていた女子生徒のトクノさん（仮）だった。

三人が僕の部屋に集い、合計7人が僕の部屋に。

僕のベッドの上にタカノ、彼女さん、ヤマダ、トクノさんが座っている。

ヤマダの隣に座つたトクノさんのヤマダへのボディータッチがすごい。

ヤマダ、困惑しながらも「テレテレ。

彼女さんのヤマダへの苛立ちにメラメラ。

僕はオロオロ。 今ここ。

「ヤマダ君さあ、今でもサッカー続けてるの？」

「あ、いや、練習きつくてさ、やめちゃった・・・」

「ええー、そおなの？ なあんだあ。まだ続けてたら、試合応援に行つたのにい」

ラブラブララブ。

僕の部屋でイチャイチャするのはゼガヒでもやめていただきたいのですが、この状況を誰よりも般若の形相で見つめているのは勿論彼女さん。

ヤマダもそれに気付いているのか、チラチラと彼女さんの方を窺っています。

ブロンンドA・Bは相変わらず床に座つてグラップラー刃牙や餓狼伝見てたりで、その他のことには一切触れていません。

さすが、急遽集まつた奴等だけあつてチームワークもヘツタクレもあつたもんじやありません。

「・・・・・・」

と、ここで、彼のタカノ君に異変が。

ベッドから立ち上がったかと思つと僕の肩を叩いて、

「もう、帰ります」

と小さく言ついました。

「テメヒつまんねえだよボケがあツ！」

とか言われたらいどひじよつ、と不安になつていた僕は胸を撫で下ろしつつ、

「あ、そう? ジャあ・・・」

そこまで送るよ。と、僕も席を立ちます。

二人して部屋を出る折、チラツとヤマダ達の方を見ました。
彼女さんの表情が文章では表現できないほど般若だったので、即効で田を背けたのはいつまでもありません。

家を出、庭を横断して玄関へ。

「何かスミマセン」

と、急にタカノ君が謝り始めたので、

「はい?」

と僕は笑顔で答えました。本当の事を言えぱ、あと一〇回ほど謝つて欲しい感じです。

「急に来てしまって・・・」

とタカノ君は若干俯いてしまいます。

大丈夫です。とか何とか言つて、その場を何とか言いつぶつり、自転車に乗つて去ろうとするタカノ君を見送ります。

「それじゃあ・・・」

「ああ、それじゃあ

バイバイ、と手を振つて、タカノ君は去つていきました。

暫く彼の背中を見送つた後、僕は自分の部屋へと戻つていいくのでした。

が、

部屋を開けて僕は硬直しました。

カツキーンと。

カツチーンと。

まあどっちでもいいんですが、トにも力クにも固まりました。

ブロンドAは僕がさつまで座っていたパソコンの前の椅子に座りパソコンを弄り、

ブロンドBは彼女さんに向けて話かけています。

依然としてトクノさんはヤマダに話しかけ続け、

彼女さんはブロンドBの言葉を受け流しつつ、ヤマダに向けて冷たい目線を送り続けています。

何よこの構図。

僕は居場所もないまま、

扉の前でただ立ち廻くのでした。

四話 タカノカエル（後書き）

最近バイトの面接に4回連続不採用です。
それだけです。

最終話 カHレー

ヤマダ、彼女さん、トクノれんは僕のベッドの上に
ブロンンドAはパソコン前にある椅子（僕の）の上に。Bは床において
あつた僕の枕の上に。
そして僕は、

何故か扉の前で立ち渴べしております。

ちなみに私は、

”僕の部屋”です。

もつ意味解りません。全然解りません。1mmたりとも解りません。
つていうか解りたくありません。

ブロンンドAとBはもはや自分の世界です。Aはパソコンを、Bは漫
画を読んでいます。

まあ、コイツ等はもはやどうでもいいんです。

所詮は数合わせに過ぎません。とか、冷静に考えれば

数合わせでもなんでもありません。何を持つて数合わせなのかをつ
ぱり解りません。

そもそも、その“数合わせ”的^{せい}で、ベッド上では熱い戦いがさ
つきから繰り広げられています。

あ、別に変な意味じゃないです。

ヤマダを挟むようにして、彼女さんとトクノさんが両サイドを固め

てこます。

まるでどこの「ハーフメ」のような状況を僕のベッドの上で展開しています。

トクノさんは執拗にヤマダと「ハーフメーション」を撮りつけています。

それに対しても彼女さんは猛烈に睨みをきかせています。

これがこれまでのあらすじです。

つまりは修羅場です。修羅場→マイルームつてやつです。

もう全然意味が解りません。

とりあえず、そんなこんなで僕は扉の前から動けずに居るのです。
その事にさえ、もはやノーリアクションです。普通、「何でそんな所に居るの?」的な発言があつて然るべきです。

が、扉の前に居る僕に対して、皆は一切触れてくれません。

この部屋の所有者は僕なのに。

ところが、ブロンドBが呼んでいた本を床に置きました。
とつとう身の回りに置いてあつた漫画を全て読み終わつたようです。
手持ち無沙汰になり、暇になつたBはキヨロキヨロと周りを見回しました。

すると何を思ったのでしょうか、突然Bは、

トクノさんを凝視し続ける彼女さんに話しかけたのです。

「何やつてんのオオオオオオオッ！」

と叫びたくなつたのをグッと堪え、僕はBを見ました。

と、こうより、「お前ナニやつてんのサ！？」という念を送つてみ

たのですが、Bはそんな念を一切シャットアウト。

そんな事に気付くことなく、彼女を元に向かって「どうの高校通つてるの?」とか、「彼氏は?」とか聞きまくつてます。

それに対して彼女さんは、「ああ」とか、「うん」とかなり冷たい返事を返すばかり。

Bは若干涙目です。

つていうか、その隣にいるのがその“彼氏”なのですが、そういうばブロンドA・Bを含め、トクノさんにもヤマダが彼女さんの彼女だという事を説明していませんでした。

ああ、そう考えれば、トクノさんがヤマダに話しかけているのも頷けるかもしません。

トクノさんはきっと、ヤマダの隣に不自然なほど密着してヤマダと腕を組みながら座っている女性を彼女だと気付いていないのです（つていうかBも気付くべき）。

・・・多分。

それならば、と僕は思いました。

トクノさんにその事を伝えるべきです。『ヤマダと彼女さんは付き合っているんだよ』と。

・
・
・
・
・
・
・
・
・

何故に僕がそんな事をせにやならんのでしょうか。

ここは僕の部屋です。何で僕が扉の前に立ち尽くしながら人に気を使つてイチャイチャしているハッキリ言つて迷惑な友達を助けなければならんんでしょう。

とかまあ、何か負のオーラが心の底から沸き上がつてきて段々腹が立つてきました。

が、ここはヤマダの為ではなく彼女さんの為に、トクノさんに真意

を伝えたいと思こます。

「あー・・・、ねえ」と扉の前で僕。

「何だ?」

と床の上からB。

「テメヒじゅねえよクソミソ」と扉の前で若干イライラな僕。

「ああ・・・」と漫画を再び開いてB。

「何だよ

と今度はA(本当です)。

「だからテメヒじゅねえってよ」ともうそろそろ憤慨しそうに元T。

「ああ、そう・・・」とパソコンに向き直りながらA。

『何?』と今度は彼女さんとトクノさんがほぼ同時に振り返りました。

ついでにヤマダも。

「あー・・・」

まさか一人とも振り返るとは思つていなかつたので若干言葉に詰まります。

彼女さんが「ツチを見ている前で、彼女さんはね云々」と説明するのは何か恥ずかしいものがあります。僕がそうやって言葉に詰まつていると、

「?」

ヤマダがコツチを見ているのに気が付きました。まるで仲間になりました
そうな顔です。

と言つたこの場から一目散に逃げ出したそうな、涙目でじつを見

ています。

つていうかそんな日で俺を見るなー全部お前（半分は僕）の時いた
種だらうー（心の声・僕）

だって・・・！（心の声・ヤマダ）

そんな心のやり取り（僕の想像）をしてこうひいて、トクノさんは
怪訝そうな顔を、彼女さんは僕に対して冷たい視線を送つてしまし
た。

僕だつてもう涙田です。

そうこうしていると、不意にAがパソコンの前から腰を上げました。
そして開口一番言いつ放ちます。

「暇だな。帰るわ」

テメエ人のパソコン弄繰り回してそりゃねえよ。とか思いまし
たが気にしません。

「そうだな。俺も帰るか」

と、今度は床に座っていたBも腰を上げます。
するとベッドの上からも声が。

「私も帰るかな」と。

その言葉はトクノさんから。

いいやつまおうつー！

と今にも飛び跳ねそうな表情のヤマダ。それと僕。

「あ、ああーじゃあ外まで送るよー！」

と僕は三人を外へと連れ出します。もはや執事ながらの動きを身に着けた僕です。

そうして外へと三人を連れ出した僕。

「じゃあな」と、AとBはバイクに乗つて去つていきました。

「また来るよ」とは一言も言ひませんでした。

「また来いよ」とは言ひませんでしたけど。

最後、自転車に跨るトクノさん、さつき言ひかけた事を説明しました。

「あの女の人はヤマダの彼女なんだよ」と。するとトクノさんはもの凄く綺麗な笑顔をつくり、

「知つてたよ（はあと）」

と一言言ひ残して、去つていつてしましました。

遠ざかるトクノさんの背中を見送り、僕は笑顔で咳きました。

「どないやねん……」「

まあ、いいや。と、僕は家の中に戻ります。

あ、そういうえばヤマダと彼女さんはまだ居るのです。
あの一人もとつと帰して寝よう。もう疲れた・・・。
そんな事を考えながら、自室へ続く階段を上り

「！」

僕は足を止めました。

声が聞こえます。

それからなにやら破壊音も聞こえできます。

しかもその音の出元はどうやら僕の部屋。

これから僕は十分間、僕の部屋の中で繰り広げられていた彼女さんのヤマダへの叱咤のおかげで、部屋の中に入れないのでした。

「どないやねんッ！－！」

最終話 カエレ（後書き）

なつがい期間をかけてようやく最終話です。

と、いうか、この話を書いている間にもヤマダ絡みの事が起きました。

が、それは又いつか書くことにします。

それから、この話を「メタディ小説だと思つている人が居るような」で言つておきますと、

この話は9割方事実です。

若干前話と食い違ひがあったとするならば、それは時間が経ちすぎて作者の記憶が曖昧になっているからです。

と、いつも楽しんで頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2302c/>

どないやねんッ！ ~いいからテメエ等帰ってくれ~

2010年10月9日21時53分発行